

一日のなかの数時間

人間には一日24時間が平等に与えられている。

では、この24時間をどのようにすごしているのだろう。

特に30数年前にこの職に就いてから、常に考えさせられてきた。

我々には「勤務時間」という一般的概念の「就業すべき時間」が定められている。

おおむね8時間がそれにあたるのであろう。いわゆる「言われたことをキチンとこなすべき時間」という言われ方のかつてはしていた。

それでも残りがまだ16時間もある。

睡眠時間が6～8時間で、最大の8時間を当てたとすると、それでも更に8時間が残る。

朝夕の食事、通勤時間がさらに必要だとした場合、何時間かが減ぜられる。

それでも「数時間」が残る勘定である。

この「数時間」の過ごし方を気にかけて生きてきたのかどうかを自問自答してみると次のようになる。

思い起こせば、まだ仕事に不慣れな時代のこの「数時間」は、おおかた「就業」していたように思う。しかも朝早く出勤して、夜遅くなつての帰宅が常であった。

そんなに仕事量が多かつたのだろうか？と振り返れば、さほどでもなかつたように思える。

ということは、「習熟度」、「慣熟度」の不足が主因で「就業」せざるを得なかつたような気がする。要するに仕事の要領が悪かつたのだろう。

「雑用の多さ」も無視できない要因であつたかもしれないが、これは自分のせいではなく、たぶんに組織の悪しき特質に起因するものと思量する。

しかし就業時間は基本的には、ある種の「ノルマ」であつて、言われたこと、与えられた任務は果たさなければ「数時間」なんて持つ権利も有さなかつたとさえ思う。

それでは、仕事に慣れてきたはずの中期はどうだろう。

比較的計画的に、しかも要領よく業務をこなせるようになり、自分の時間を持っていると感じられるようになっていたように記憶する。要するに就業時間のなかで大体のことを処理できていたのだろう。更に余裕すら持てる状況の時代でもあつたのではなからうか。

では、与えられた業務をこなしてできた就業中の「余裕」とおぼしき時間をどうすごしていたのだろう。

今から考えれば、決して遊んでいたわけでもなく、そんなときには、さらなる「業務の効率化のための工夫に血道を上げていたように思う。

それは自分の業務のためのみならず、業務環境や仕組みの改善に知恵を使っていたという自負がある。丁度そのことが、OA化のはしりの時代であったことも一助となっていたことも否定できない。言ってみれば「数時間」は潜在的な就業時間の中にすらあったのだが、自己研鑽に活用はしていないことになる。

では本題の就業後の余裕時間、いわゆる「数時間」はどう過ごしていたのだろうか。おそらく行動の中心は家庭や遊興であったのだろう。どうしても子供に関わることや年代相応の嗜好に関する事、あるいはいつのまにか身について慣習は環境に流される時代だったのだろう。したがって、就業後に自己研鑽に費やす時間は、初期とさほど変化がなかった、というより、本題の「数時間」はむしろ減ったのかもしれない。

それでは仕事の経験を多年にわたって蓄積し、業務のこなし方も円熟したはずの最近はどうだろう。

自らが汗を流すことが少なく、ある程度計画的に、主体的に時間を管制できる立場になったけど、汎用や行事が多くなり、また背中に視線を感じる立場であればあるほど就業中も就業後も自己研鑽に費やす機会は減ると同時に意欲も減退して、ただやたら時間の経過が早く感じられるようになる。したがって、「数時間」は、初期、中期に比べて、はるかに減ってしまったのではないかと、あせりすら感じるようになる。要するに、余程意識しないと「数時間」がどこかへ消えてなくなっているように感じる今日この頃である。

そんな風に過去の経過を顧みれば、いかに一日のなかの「数時間」の過ごし方を軽視していたかという反省だけが芽生える。

もっと勉強しておけば良かったかな？

もっと本を読んでおけば良かったかな？

あれも、これもやっておけば良かったかな？

やれる時間は今から分析すれば十分あったのではなからうか？などと。

これは積算すれば、一生のなかでは「数年間」になるが、「一生の中の数年間」をどう考えるかという問題とは本質的に異なるもので、もっと真剣に悩むべき大事なことなのかもしれないなどと思うのは、決して独りよがりの意見ではないと思う。

殆どの方が、以上述べたような反省は多かれ少なかれ人生の晩年には感じるのであろうと推察するので個人的には悲観しないけど、これから長い人生を歩むであろう若者には、今のうちから「一日のなかの数時間」の過ごし方を工夫することを薦めたい。

ではどう過ごせば良いのか？という問いが飛び交いそうだが、どんな過ごし方が的確なのかは自分自身で考えるべきことであり、それを考えることも有意義な「数時間」の一部を成すと認識すればよいのである。

これこそが、「人生は繰り返すことがない」ということを身をもって経験した熟達者（年配者）が自然に到達する悟りの極意であるから、折に触れて我々が伝承することに心がけなければならないのではなからうかと大いなる親切心を持つ昨今である。

一日のなかの、人それぞれの有意義な数時間を過ごされたい。

以上